

# DreamCross外伝 ～歪んだ世界の裏側で～

(略して) 将軍

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この作品は、自作の著作権SRCシナリオDreamCrossの外伝的ストーリーを扱っています。

DreamCross: <http://www48.atpages.jp/syoungun/DreamCross/>

ある程度本編クリアしてから見て欲しい構成にはなっていますが、SSに興味持っていたただけたうえで、SRCにも興味持っていただければ嬉しいです。

裏話、ネタ話、4コマ風節操なく扱う予定です。

SRCの会話は基本的に台本風となるため、文章力不足が現れるところがあると思われませんが、そういう箇所見当たれば感想掲示板等で指摘して頂ければ幸いです。

また、確実とは言いませんが本編に絡むネタで書いて欲しいものがあれば

感想の方に要望書いて置いてくださいませ、可能な限りは答えたいと思うので

### ・参戦作品

SRC学園（オリジナル枠）

カードキャプターさくら

魔法少女リリカルなのは

アルカナハート

鋼鉄天使くるみ

ストライクウィッチーズ

テイルズオブファンタジア

エレメンタルジエイド

Rosenkreuzstilette

ワルキューレの冒険

ヴァンガードプリンセス

## 目次

### 設定資料集など

本編でのキャラクターちよつとだけ解説	1
エピソード・オブ・さくら　　〈始まりの出会いと別れ〉	
エピソード・オブ・さくら	4
エピソード・オブ・さくら	11
エピソード・オブ・さくら	17
エスケープ・フロム・ベネツィア　　〈集う訪問者たち〉	
エスケープ・フロム・ベネツィア	25
エスケープ・フロム・ベネツィア	28
激戦の後から、次の始まりまで　　〈第1部終了後〉	
ジャンブル・プラトウーン	32

## 設定資料集など

### 本編でのキャラクターちよつとだけ解説

・木之本桜（カードキャプターさくら）  
最後の審判を乗り越え、正式なクロウカードの主となった小学5年生の少女

全52種の強力な魔法のカードを使用でき、尚且つ本人も小学生と思えない身体能力を持つ

……が、最悪のタイミングで襲撃を受けた事がきっかけで、単身並行世界へ流れることに

全てのカードが使える状態なら、名実ともに万能すぎるオールラウンダーだが

カード切り替え時期なので、一部のカードしか使用できない

・李小狼（カードキャプターさくら）

香港からクロウカードを集めに来た魔術師少年

身体能力・魔術の才能、共にさくらにならぶほど高い

襲撃を受けたことがきっかけで、さくらと離れ離れになってしまうが

同じ境遇の仲間たちと出会った事がきっかけで、さくらを探すため、旅に同行する

・大道寺知世（カードキャプターさくら）

衣装づくりと、ビデオ撮影を趣味に持つさくらの親友（作中・又従姉妹と判明）

突如、行方不明となってしまったさくら達を追って、

愛乃はあと達と共に情報を集めていく中、事件に巻き込まれる

さくらとの再会が、1部エピローグの為、さくらの話題が出ない限りはまとも

……話題が出たら、思いつきはっちゃけるが

・フェイトIIテストアロッサ（魔法少女リリカルなのは）

さくらと小狼を襲撃し、その後本編で何度も襲撃してくるこ

る金髪少女

構成が原作より大幅に強化された仲間達と共に挑んでくる

なお、主にコメディ色が強い連中ばかり集まってくるため、原作より孤独感は薄め

・ギルガメツシユ（サプライズ枠・ファイナルファンタジー）

実力は高いのだが、コメディ色が強く間が抜けたイメージが強い武器コレクター

但し、鑑定眼が怪しすぎるためパチものばかり掴まされている模様

フェイトとよく組んで出てくるが、更にコメディリリーフ色が強いヤツと一緒だと

マンネリなんかは気にしない有名悪役に似た構成になってしまいう気が……

・甘楽冴姫（アルカナハート）

雷の聖霊・ヴァンリーの力を使う聖女、ガイル風溜め待ちキャラ過去に起こった事件が元で、現在関東に起こっている異変に真っ先に気づき

調査を始めた結果、襲撃に巻き込まれて異世界に飛ばされてしまう……なお、本編唯一の離脱したまま戻ってこない味方陣営キャラである

・ミラルドルーン（テイルズオブファンタジア）

本編で真っ先に出会うことになる原作持ちキャラ

名前だけだとわかりにくいかもしれないが、尻に敷かれマンを敷いている人といえ

ば原作プレイしたことがあるなら、まずわかるはず

本来は原作同様、家で待っている役どころだったが、わざわざアイコン作ってもらったので、旅に同行

そのおかげで、羽目を外したクラスが

ラッシュ大尉（※タイムクライシス4）に代わってお仕置きさせられました

なお、作中天翔艇・小型艇の操縦がうまいのは、

絵師つながりの発想から出た悪乗りである

・SRC学園の人々

シエアード企画、SRC学園参照のこと

なお、さくら保護後に訪れる客は、秀一を除いて  
全員がロリコン疑惑の非常に高いキャラである

エピソード・オブ・さくら　　～始まりの出会いと別れ～

エピソード・オブ・さくら　　— 01 —

暗く、生物の気配が感じられない空間に、その少女は立っていた。周囲には、血の色のように赤い霧が立ち込めており、足元がどうなっているのかもわからない。

「ここ、どこなんだろう……？ 私、どうしてこんな所に……」

問いかけても、その答えを返してくれる者はおらず、

見廻しても、霧以外の物は目に映らない。

「怖いよ……オバケが出てきたらどうしよう……」

大嫌いな、幽霊が出てきそうな雰囲気におびえながらも

とりあえず、憂鬱な気持ちで、とりあえず前に進んでみることにする。

とは言っても、霧が濃いのでちゃんと前に進めているのかすら定かではない

だが、しばらく歩いた所で、足元になにか硬い物の感触が返ってきた。

「ほえ……？ なんだろう、これ……？」

かがんで、足に触れた固い物に今度は手で触れてみると、ゴツゴツとした手触りを感じた。

「これって、木の……根……？」

ふと、顔を上げてみると、霧の向こうに背の高い大きな影が見えた。どうやら、あれがこの根の持ち主らしい。

少女が根の上に乗りに近づいていくと、徐々にハッキリとした姿が見えてきた

「わあ……おっきい木……！」

少女が見たものは、目を疑うほどの巨木だった。

霧のせいで、全体を見ることはできないが



今、目にすることができる部分からでも、

とてつもない太さと高さだという事がわかった

「こんな大きな木……」近所にあつたつけ？」

いぶかしげに思いつつも、とりあえず少女は木に触れてみる

手には、先ほどの根と同じ感触が返ってきた

「月峰神社のご神木は、ここまで大きくなかったし……」

……ほえ？」

ハッキリとはなかったが、少し離れた場所から、妙な感覚を感じ  
そちらへと足を進めてみると、少し進んだ所に大きな洞があつた  
「この中から……感じる、なんだろう、この気配……？」

洞の中は真つ暗で、霧の中以上に視界が利きにくい

少女は、洞の中に身を乗り出し、大きな声で叫んだ。

「すいませーん！ 誰かいませんかー!？」

少女が身を乗り出している洞はかなりの大ききで

後ろから見れば、木が少女を飲み込もうとしているようにも見える

もし、後ろから彼女の背中を押す者が居れば

少女はそのまま洞の中へ吸い込まれるように落ちていくだろう

……もし、背中を押すものが居れば……

「え……？」

突如、身体が軽くなったように感じた

「ぎゃあああああ……っ！」

目の中に、先ほど自分が身を乗り出していた洞が映る

しかし、そこに何があるのかは少女にはわからない

結局、何が起こったのかわからぬまま……

少女は、闇の中へと吸い込まれていった……

~~~~~

「それは確かに、変わった夢だな……」

1学期の終業式を終え、家への帰路へと向かう子供達

その中で、赤い霧と巨大な樹の……夢を見た少女「木之本桜」は  
同級生の少年「李小狼」と、自分が見た夢について話していた

「目が覚めたとき、ベッドの上から転がり落ちちゃって  
ケロちゃんは笑うし、お兄ちゃんはまた怪獣が暴れたっていうし  
……！」

目覚めた後の事を思い出して、桜は憤慨する

怪獣と言うのは、兄「木之本桃矢」が桜の事をからかう時によく使う言葉である

桜本人にとっては、決して見逃す事のできない禁句の様なものであり

以前別の人物から連呼された時は、桃矢が畏怖する程度の殺気を放ったこともあった

……もつとも、桃矢のからかいは親友の雪兎からシスコン呼ばわりされるほどの

妹を溺愛するが故の愛情の裏返しなのだが……

閑話休題

「それにしても、赤い霧と大きな樹か……」

もしかしたら、それは予知夢かもしれないな」

「けど、クロウカードは全部集めて、最後の審判も終わったのに……」

クロウカード、不世出の才能を持つ史上最大級の魔術師

母親が小狼の一族の出であり、彼と親戚関係にあたる

そのクロウが残した遺産の中で最高と呼ばれるものがクロウカード

52枚のカードそれぞれが自我を持ち、強力な魔法が込められている

かつて、散らばったクロウカードを

桜と小狼は、時には競い合い、時には協力し合って捕獲していた

そして、カードの真の主と認められる為の審判……

厳しい審判ではあったものの、さくらは見事に主として認められた  
それからすでに2月経ち、おかしな事件は起こらなくなった  
のだが……

「事件を起こすのはクロウカードだけとは限らない

……あの大道寺きらみたいなのも居るわけだしな」

「はう、そういえば……」

きらちゃん、いつも私の事を目の敵にしてるんだよね」

さくらは昨年臨海学校以降、頻繁に勝負を仕掛けてくるようになった

年中スクール水着の天才少女の事を思い出す

「負けず嫌いそうだから、さくらに負けたのが、よほど悔しかったんだろうな」

彼女は、さくらと同じ年ながらも、海外の大学を飛び級で卒業し

とある分野の研究に関しては、世界的に有名な文句なしの天才であるが……

ちよつとしたいぎこぎから、半ば無理やりに勝負を挑まれて、勝利してからというもの

事あるごとに新たな発明品を使って、さくらに勝負を挑んでくる悩みのタネでもある

「私は、勝負する気はないんだけど、きらちゃんいつも勝手だから……」

今度は最高傑作で私の事を倒す、とか言ってたけど……

いい加減、あきらめてくれないかな……?」

(無理だろう……)

きら自身、自分と互角以上(実際の対戦成績は全敗だが)に渡り合うさくらのことを認めているのだが

尊大かつ負けず嫌いな性格を考えるに、あきらめる事だけはまずありえない話である。

「……ところで、李君は夏休みどうするの? やっぱり、今年も、香港に……」

そう言いながら、1年前、商店街の抽選に当たり、香港に行った事を思い出す

クロウの因果による水使いの魔術の事件、小狼の実家【李家】への訪問

及び、小狼の4人の姉と現当主の母

大変ではあったが、今ではどれも良い思い出

「……いや、今年はずつとこっぴちにいる」

「そうなんだ、じゃあ今年の夏休みは李君も一緒に遊べるんだね」

真底嬉しそうな笑顔の返答に、顔を赤らめながら目を背ける

心の中では、それもいいなと思っっているが……

実際のところ、今年の夏休みに小狼が日本に残るのは

母・夜蘭からの命によるものが大きい

実は最後の審判を終え、さくらがクロウカードの主になってから

彼女の周囲で、様々な組織が潜む様になっていた

今のところ、表立った行動をしてくる所はなく

日本聖霊庁がひそかに護衛しているためか、はたまたさくら自身の性格ゆえか

本人は偶に変な気配がすると思う程度で、全く気付いていないが

万が一にも、それらの組織の手にさくらが落ちるような事は

クロウの縁者である李家には、いろんな意味であつてはならない事である

故に、幼いながらも李家で一番強い魔力を持った小狼に

彼女を護るよう言いつけられたのだ

もつとも、本人でさえ気づいていない信条の変化により

その命がなくなるとも、今と状況は変わらなかつたかもしれないが……

そのまま、帰路の途中にある公園まで行き着くと

腰まで届く青髪に、黄色いヘアバンド

そして、制服にチェック柄のチョッキを付けた

二人より少し年上の少女の姿が目に入った

「ん？ あそこにいるのは……」

「甘楽さん！」

甘楽冴姫、御苑女学園中等部に通う中学二年生

成績優秀で、生徒会書記を務める優等生

実家が貿易商をやっている縁で、小狼は来日前にも何度か顔を合わせた事がある

「あら、さくらちゃんに李君、こんにちは」

「こんにちは、甘楽さん」

「こんにちは……」

さくらが元気いっぱい、小狼がややぎこちなく挨拶を返す

「今日は、知世ちゃんは一緒じゃないの？」

「はい、今日はおうちの用事があるからってSPさん達と一緒に車で……」

「へえ、珍しいわね」

「そつちこそ、今日は愛乃と一緒にじゃないのか？」

愛乃はあと、いつも冴姫と共にいる親友の姿が今日はない

「うん、今日はちよつと……ね」

歯切れの悪い答えを返す冴姫

いつものハッキリとした物言いからすれば、今日の冴姫の様子は少しおかしい

「……悪いけど、今ちよつと急いでるから」

だが、今はその事を問いただす時間はなさそうだった

「あつ、すみません……忙しい時に呼び止めちゃって」

「気にしてないわ、また今度時間が取れたら喫茶あいので……」

そう言い残し、去る様にその場から立ち去ろうとする冴姫

……その直後、周囲に強い魔力の気配が現れると、驚愕した表情でさくらの方へ振り向く

「冴姫や……!?!」

名を呼び終わらないうちに、視界が傾き、身体が軽くなった直後……

疾く、まぶしい何かが目の前を横切る

我に返ると、さくらは小狼のすぐ横にいた

小狼は険しい顔で、いつの間にか剣を構えており

冴姫も、聖霊・ヴァンリーの力を解放していた

小狼と冴姫の間には、槍を構え、赤いフードを被った大柄な男と

二つに束ねた金髪をなびかせ、輝く鎌のようなものを構える黒衣の少女

周囲に、それ以外の人間は誰も居ない……

~~~~~

……数時間後、大道寺邸

「はい、大道寺です……」

まあ、さくらちゃんのお兄様、いつもお世話になっております……さくらちゃん？ いえ、家には来ておりませんけど……」

ブウウウン!!

金髪の少女が、大きな鎌のような武器を振るう。

小狼は、それをかわした直後、札と共に、剣をかざして、力を持つ言葉を放つ。

「風華招来!!」

並みの人間なら、大きく吹き飛ばされるであろう強風が少女に向かう。

流れるような動きから繰り出す魔法に、一瞬躊躇う少女だったが、すぐに反応して上空に逃げた。

「アイツ、速い……!」

攻撃を避けられた小狼は、悔しそうな顔でつぶやく。

奢っている訳ではないが、自分と同じか、年下かもしれない少女にこころも苦戦するとは思っていなかったのだ。

どこかの組織から差し向けられたのだとは思うが、さくら以外で、これだけの魔力を持つ少女の噂は

小狼も、今まで聞いたことがなかった。

闇の聖霊を使う、緋色の目をした聖女の事は

耳にしたことはあったが、少女の戦法はアルカナ使いのそれとは明らかに違う。

一方、冴姫ももう一方の襲撃者を相手にするも、苦戦しているところであった。

桁外れな巨躯、力強そうな豪腕を持つ大男を相手に、

距離をとりつつ翻弄しようとするも、巨躯に反して、男は意外にも身軽な動きを見せた。

ならばと、聖霊の力を借りて雷撃の力を放ち直撃させるも、

男は少し驚いた表情をした以外、まるで応えてない様子を見せる。

そして、焦りを見せる冴姫に、男は片手を突きつけ、力を持つ言葉を放つ。

「エアロラ!!」

男の手から放たれる魔法の風、威力は小狼の風華に劣らない。突然の攻撃に驚くも、ギリギリの所で冴姫は魔法の風から逃れる。力だけと思っていた相手の、身軽さと魔法に意表を突かれる形で、冴姫は、大男にどう対抗するか、攻めあぐねていた。……さくらは、二人の戦いをそれほど離れていない距離から眺めていた。

最初に狙ってきたターゲットがさくらだったことから、小狼が、相手の目的をさくらだと判断し、自分に任せて逃げるよう指示したが、

友人を置いて逃げるような真似はさくらには出来ず、また、日中なのに自分達以外の人間の気配を感じられなくなったこの空間からは

たやすく逃げ出すことは出来ない、直感で感じていた。

「……二人を助けなきゃー!」

そう決めたさくらは、自身のペンダントを手に持ち、力ある言葉を唱える。

「闇の力を秘めし鍵よ、真の姿を我の前に示せ。

契約の元、さくらが命じる……封印解除（リリース）!!」

普段はペンダントに姿を変えている魔法の杖、封印の鍵を本来の姿へと帰るための呪文……。

……しかし、鍵が彼女は言葉に応えなかった。

「え……?」

予想していなかった事態に、一瞬思考が停止するも、もう一度、今度は力強く呪文唱える。

「闇の力を秘めし鍵よ! 真の姿を我の前に示せ!

契約の元、さくらが命じる……封印解除（リリース）!!」  
だが、それでも鍵は応えない……

「どうして……?」

小狼と冴姫が、さくらの異変に気づくも、



目の前の敵から目を逸らせず、彼女に近づくことが出来ない。

……その時、その場にいた皆の上で、強い力の気配が感じられた。

「あれは……?」

その気配に気づき、全員が思わず上を見上げる。

そこにあつたのは、空に穴が開いたかと思うような、周囲とは違う赤い空間であつた。

(あの色、夢の中と同じ……?)

さくらがそう考えた瞬間、その赤い空間は周辺のを吸い込み始めた。

「これは……あの時と同じ……!?!」

「クツ……木之本!!」

身体が浮き上がり、赤い空間に吸い込まれそうになるさくら達。

何とか抵抗しつつも、バラバラにならぬよう、さくらに向かって片手を伸ばしてくる。

「李君……!」

さくらも、小狼の方へと手を伸ばす。

だが、吸引を始めた空間の起こす風はあまりにも強く

中々二人を近づけさせようとはしない。

そして、あと少しで手が届くという距離で

強い風が巻き起こり、さくらと小狼を大きく離してしまった。

「李君!!」

「……! さくらあああああつ!!」

~~~~~

「ほえ……ここは?」

気がつくくと、さくらは見知らぬ部屋で目を覚ましていた。

内装は、畳敷きにふすまと、古い漫画に出てきそうな一室だったが、

古さを感じさせるものは全くなく、清潔で綺麗な部屋であつた。

ぼうつとしながらも、ひとまず落ち着くと、

自分が眠っていたのは、布団の上だったことに気づく。  
誰かが、気を失っていたさくらを、ここまで連れて来てくれたよう  
だ。

「……あの時、空にあいた穴に吸い込まれて……」

「そうだ！ 李君！ 冴姫さん!!」

共に居た二人の名を呼び、辺りを見回してみるも、部屋の中に姿は  
ない。

窓から外の様子を伺ってみる、そこには、深い森が広がっていた。

一瞬、公園の近所かという考えが浮かんだが、

森の規模の大きさに、公園の林ではない、見慣れない風景だとい  
うことに気づく。

「……他の部屋に、いるのかな？」

そう言っ、入り口のふすまを開け、部屋の外に出るさくら。

その先には、内装によく会うアパート風の廊下が広がっていた。

~~~~~

「……それで、その子は？」

「私達の部屋で寝てるよ、疲れてるみたいだけど、特に怪我はないみた  
い」

は さくらの居た建物とつながった、もう一つの食堂らしき建物の中  
で

二人の少女が、話をしていた。

「いったい、どんな子なの？」

テーブルにかけている眼鏡の少女、鈴衣 紬（すずえ つむぎ）が  
少女について問いかける。

「歳は小学生くらいかなあ？ 寝顔しか判らなかつたけど、ちっちゃ  
くて、すごく可愛い女の子だよ」

コップを運び終えたお盆を抱え、大柄な少女、ミカド||ミスマルが

問いに答えた。

服飾の趣味を持っているからか、可愛い少女と言う所に反応し、紬は興味心身で、更に話を聞こうと身を乗り出す。

「可愛いって、どれくらい?」

「お嬢様って言うよりは、元気な子ってタイプだけど」

可愛さは、もうものすごく!! って感じ」

「フリフリのドレスとか、似合いそう?」

「色にもよるけど、明るい色なら似合おうと思うよ。」

数年前にあった知り合いの好むドレスと、それを身に着けた少女の姿を思い浮かべながら

力説するミカド、話に聞き入る紬。

「……けど、そんな子がどうして樹海の中で?」

「なんだよねえ……狩りの途中で拾ってきたって言うんだけど」

疑問を口にし、テンションが一転する二人。

「その子、ヌコモドキ……じゃないよね?」

「もちろん、それもあって考えて、チテイ人の所にも聞いてきたらしいけど

どっちも違うって、そもそも耳は普通で、尻尾も生えてなかったし」  
樹海の中に住む、人によく似た2つの種族を思い浮かべる紬。

ヌコモドキは、語尾に癖があるだけで、普通に会話できるレベルだが、

チテイ人は、言語自体が独特で、普通に会話するのは難しいはず

そんな相手に、どうやって聞き出したのか、いささか疑問に思うのであった。

「それに、来てた服もどこかの学校の制服みたいだったけど」

学園のデザインの制服じゃなかったんだよね」

「……やっぱり、3学園の制服、全部違うってこと?」

「うん」

ミカドからの肯定の返事を受け、口元に手を当てて考える紬。

見たことのない少女、という切り出しで、その可能性は高いと思っ  
ていたが

いくら考えても、外部の学校の人間が樹海の中で倒れている理由が浮かばなかった。

「異世界に通じる聖域の門の噂は、入学後から幾度か耳にしたことはあったが、

所詮、眉唾物の作り話程度の滑稽な噂話である。

最近、樹海の内部で行われているという、黒い噂のことも頭を掠めたが、

少女を保護してつれてくるという行為自体、その噂の内容とそぐわない。

「……どこの子なんだろうね、その子？」

「まあ、もうすぐ目を覚ますだろうから、その時に話を聞けば……」

ふと、視線を袖から横に逸らした直後、ミカドの話が止まる。

その視線を追ってみると、奥に繋がる廊下の出入り口から、

少女がオロオロと戸惑っているのが見える、こちらと視線が合うと、驚いた様子で一言言葉を発する。

「ほえ……っ！」

袖は、彼女が件の少女であると、直感で理解したのだった。

……うん、話を聞く前からそんな感じはしていた。

学園の物じやない制服を着た、小学生くらいの女の子が、

あのタイミングで、あんな現れ方をする時点でただ事ではないけど、

話を一通り聞いて確信した、この子はこの世界の人間じゃない。

一般常識を弁えたいいい子ではあるが、その他の学園における常識、

それ以上に、現在の世界において、知らないはずの無い知識が、完全に抜けている。

強い力の持ち主だと言う事は感じるが、それを他人にあまり知られたくないのか、

明らかに何か隠し事をしている様子は見受けられる、傍から見たらバレバレだけでも。

だが、どう見ても悪い子には見えないのでそこは置いておこう。

重要なのはこれからどうするかだ。

「フータッチ」の勘が働いたのか、今日はいつもは寄り付かない連中が来店してくる。

地元の仕事で来た際、知り合いの家のワガママ娘に偉く好かれて櫻崎は、

少し離れた席に案内したが、頻繁に彼女の方を見ており、

気づいた彼女が、笑顔で会釈するのを見てあわてて目をそらした。

この現場に、あのワガママ娘が踏み込んできたら、偉い事になるだろう。

日暮は、入店時から彼女の事を凝視していたので、更に少し離れた席に案内してやった。

服飾の趣味がある日暮は、彼女をモデルにして服が作ってみたかったのか、

もう少し近い席にしてほしいと頼み込んできたが、

コイツも疑惑は薄くない方なので、これで限度と断った。

小柄な日向なら、まだなんとかなったと言ったら、

物凄い形相で涙を流していた……お前、そこまで実兄が嫌いか。大練寺と魔崎は、一番遠い席に案内した。

それぞれ、連れの少女にからかわれて真っ赤になって否定しているが、

やはり笑顔で会釈した彼女を見ると、妙に赤い顔で笑顔を返してまた連れから、追求を受けている。

鳴海と黒木の真っ黒コンビは、店先から彼女の姿をみるや否や、店に飛び込んでこようとしていた。

こんな奴等、店に入る事すら許さん。

子供に暴力シーンを見せるのは良くないので、彼女の位置から死角になる場所です。

すごい勢いで店に飛び込もうとした2人を一撃でノックアウトする。

漫画のノリで、『お前達に、今日食わせるメシはねえ!』と言ったら、『表からじゃ、無駄な乳の女が邪魔』『ノータッチ』は人類共有の宝』などととんでもない事をのたまった。

こんな輩にかける慈悲は無いが、ふと彼女から聞いたある事を思い出し、2人の耳元にささやく。

「あの子の友達がまだ見つかってなくて、もしかしたら樹海の中に居るかもしれないぜ」

それを聞いた途端、物凄い勢いですっ飛んでいった2人。行き先はもちろん、樹海の真っ只中。

一通り見回して、それらしい人間は確認できなかつたし、樹海の中に住む連中にも頼んできたが

事が事だけに、状況はネコの手も借りたといった所。

期待度はネコ以下だが、それでも無いよりはマシだろう。

ネコに鯉節……という言葉も浮かんだが、そっちの方は心配ないだろう。

見つからない友達の容姿を聞かずにすっ飛んでいくんだもの、相手は男とおまいらの射程範囲外だ。

まあ、せいぜいがんばってくれ。

再び彼女の元に行くと、先ほど用意した新メニューの冷やし中華を美味しそうに啜っていた。

泣きたい位に心細い状況だろうに、回りに心配をかけまいとしているのか、その顔に曇りは無い様に見える。

一刻も早く、何とかしてあげたいと思うも、現状頼りになりそうな相手は学園内に居ない。

学園長達は、なにかの会議の為に全員出張。

島内のホテルで総料理長をやってる親戚のオツちゃんも、料理大会の為に不在。

学園を管理する3つの財閥は……危険な気がするのでやめておいた。

水無月は、彼女の持つ力について興味を持つ可能性があるし、九重も、最近きな臭い噂が立ち込めている。

朱雀院は……完全に論外だ、あの「キャツキャツ、ウフフ」お嬢様が彼女の事を知ったら

例え、地球の裏側に居てもすつ飛んでくるだろう。

彼女の容姿は、ストライクゾーン通り越して魔球の域だもの。

……まあ、学園内が頼りにならなければ、外に頼ればいいのだ。

多少手間がかかるが、そつちの方が安心なので、懐に入れた電話に手を伸ばす。

当ては、いつも世話になっている知り合いの爺さん。

子供好きなので、きつと話に乗ってくれるだろう。

そう考え、懐から電話を出し、爺さんへとかけたのだった。

「本ツ当くくくくに、能力者の事知らないの?」

信じられないって感じの顔で、紬さんが聞いてきたこの質問。

李君の様な魔法使いや、はあとさんの様な聖女は知っているけど、能力者と言う力を使う人の事は、聞いたことがない。

「……はい、私は一度も見たことも聞いたこともないです。」

「鈴衣さん、そんなに何度も聞いたら可哀想だよ……」

隣に座るミカドさんが、紬さんに軽く注意してくれた。

聞いた話では、こちらの世界には、普通に魔法のような力を使う事の出来る

【能力者】って呼ばれる人達が居る達がいるみたい。

今、私が居るSRC島っていう島の学園には、その能力者に対して正しい使い方を学ぶ為に、日本中の能力者が集まっているんだって。

紬さんや、ミカドさん、さつき料理を持ってきてくれた姫神さん。

そして、他にもお店の中に居る生徒のほとんどは能力者って話をしてくれた。

最初は信じられなかったけど、窓の外に行く人の中に、

すごいスピードで走ったり、空を飛んだりする人が見えたから、

紬さん達の話は本当なんだってわかった。

……ここが、私の居た世界じゃないってことも。

「あ……ごめんね、あまりにも信じられなくて」

「いえ、いいんです！」

紬さんが、謝るように頭を下げたが、かえって申し訳なく感じてしまった。

私が、初めてケロちゃんやクロウカードと出会ったときや、

はあとさんと出会った時に、魔法や聖霊について、すぐには信じられなかったみたいに

こつちの世界では、能力者が居るのが普通だと思ったから。

「それにしても、これからどうするの？ 帰る当てとかある？」

「わかりません、どうやって来たのかわからないし、気が付いたら、2回で眠ってたから……」

「姫神君が拾ってきたんでしょ、なにか気づいた事は……」

紬さんが、姫神さんに話題を振ったけど、姫神さんは誰かに電話を聞いて聞こえなかったみたい。

なんか、電話の相手に対して不機嫌そうに話してる、相手は、お爺



さんみたいだけど……

「……とりあえずは、それ全部食べちゃおうよ。」

お腹が空くと、いい考えが浮かんでこないと思うし。」

「……はい、色々とすみません。」

ミカドさんに進められて、まだ残っていた冷やし中華に手をつけた。

お腹が空いていた事を差し引いても、とっても美味しい冷やし中華で、

紬さんは私と同じ1杯だったけど、ミカドさんは5杯目を口にしていた……

雪兎さんと同じくらい食べるんだ、ミカドさんって……

「さくらちゃん、こっち向いて〜♪」

「ほえ?」

カシヤツ

姫神さんの声で振り向くと、片手に構えた携帯電話からシャッターの音がした。

……ひよつとして、今、写真に取られた?

「ちよつとー! 女の子が食べてるのに写真を撮るのは失礼だよ!」

紬さんが抗議してくれたが、姫神さんは再び電話をかけて、声が入ってないみたい。

どうやら、さつきと同じおじいさんに、今の写真を送ったようだけど……

はう〜……恥ずかしいよう

お店で、冷やし中華をぐい馳走になった後、また眠くなってきた私は、シャワーを浴びて、着替えてから休む事にしました。

着替えは、鈴衣さんと日暮さんと言う人が用意してくれ、お礼を言ったら、二人とも気にしないでと言ってくれました。お布団に入って、横になったらすぐに眠くなって……どの位眠ってたんでしようか、次に目を覚ました時は、隣で、ミカドさんがグッスリと眠っていて。

外はすっかり暗くなっていて、気が付いたら、お昼をご馳走してもらったのに、またお腹が空いてました。はうら、ずっと眠ってばかりだったのに……本当に、どれくらい眠ってたんだろう……？

とりあえず、廊下に出てみたら会談の方から人の声が

……片方は、姫神さんの声……まだ起きてるんだ

「そうか、そいつはご苦労な事だな」

「ご苦労さんじゃないよ、こっちは大変な目にあつたんだからなんとかギリギリ解決したものの、今度は……」

昼と同じ様に、出入り口の影から様子を伺っていると、姫神さんと、同じくらい背の高い人が喋ってました。

「……んで、連れて帰って来たら

あのバカ、人が「ノータッチ」に走ったとか、とんでもない勘違いをして……」

「それで、その後はいつものパターンか？」

「残念ながら、子供の前じゃ出来ないからね……」

お仕置きは、あの子の事なんとかしてからに……？」

話していた人が、出入り口に居た私に気づくと

姫神さんも、その人に釣られる形で、こちらに気づきました。

「なるほど、彼女が件の少女か」

「さくらちゃん、起きて来てたのか……」

まあ当然か、お昼からかなりの時間が経ってるし……

シユウ……このお兄さんと、同じ物でいいかな？」

高見沢秀一（たかみさわ しゅういち）さん、ミカドさんと同じく、

姫神さんの幼馴染と言うこの人は、このお店に頻繁に出入りしているそうで、

遅めの晩御飯を食べに、お店にやってきたそうです。

晩御飯を頂く時に、いろいろと話をしましたが、

ちよつと怖い雰囲気の人だけど、私にも優しくしてくれて、

少しお兄ちゃんに似てるかな、と思いました。

「別の世界からたどり着いた……か

確かに、この学園でならそういう事が起こっても、おかしくは無い  
な」

「この学園で……？」

「ここ、私みたいな子がよく来るんですか？」

「似たような事は、今まで何度か起こったという噂は聞いたが

別に、そういう意味で言ったわけじゃない……」

ただ、この島では、何が起こってもおかしくないと言う事だ」

「こら、シユウ！ 小さい子を脅かす真似をするんじゃないよ

……たく、妹への意地悪じゃ物足りなくなってきたのか？」

軽く鼻で笑う高見沢さん、姫神さんの話では、高見沢さんにも、同じ年頃の妹さんが居るそうです。

……やっぱり、そういう所もお兄ちゃんに似てるかも。

「まあ、お前が居るなら特に問題は無いだろう。

……じゃあ、俺はこの辺で失礼する。」

「ああ、気をつけて帰れよ。」

そういって、高見沢さんは帰っていきました。

少し遅れて晩御飯を食べ終わった時には、

今度は姫神さんがどこかに出かける支度を始めていました。

「こんな夜遅くに、どこかに出かけるんですか？」

「うん、ちよつと用事が出来ちゃってね……」

少し帰りは遅くなるかもしれないから、ミカドと一緒に寝ててやって  
くれ

眠れないんだったら、居間のテレビとかは自由につかっているか  
ら」

「はい、ありがとうございます……」

姫神さんや、ミカドさん、ここで出会った人達は優しい人達ばかり

だけど、

私、いつまでここに居るんだろう、ちゃんと帰れるのかな……。

お父さんとお兄ちゃん、心配してないかな、李君と冴姫さんは大丈夫なのかな……

ふと、そんな事を考えてたら、また悲しい気持ちになってきてしまった……

気が付いたら、涙があふれてきてました。

「心配ないさ、今はちよつと間が悪いだけで、もうちよつとしたらきつと良くなるって」

そういつて、姫神さんは慰めるように私の頭を撫でてくれました。

「姫神さん……」

「はぐれた友達とも会えるし、きつと元の世界に返れる。

だから、心配しないで……な」

ただの慰めなのかもしれないけど、その言葉には、

本当に何とかしてくれるような力がありました。

「そうですよね……きつと、李君も冴姫さんも……絶対、大丈夫だよ」

「うん、そういう事♪ それじゃ行つて来るから、ミカドの事をよろしく頼むぜ。」

そういつて、勝手口の方から姫神さんが出かけていつて、

私は、元に部屋に戻つて、また眠る事にしました。

……この時は思いもしませんでした。

次の日、学園が変な赤い霧に包まれてしまい、何人もの人が行方不明になって

その中に、姫神さんも含まれてしまったなんて……

エピソード・オブ・さくら【END】

エスケープ・フロム・ベネツィア 〳 集う訪問者たち

エスケープ・フロム・ベネツィア 〳 〇〇

日課の掃除を終えて、一休みのために椅子に腰を下ろす。

「ふう……」

いつもならば、いくら片づけてもすぐに本が散らばる有様なんだけど、

今日に限って言えば、いくら待っても散らかる様子は見られない。

「静かね……こんな雰囲気はいつ以来だったかしら？」

理由は至って簡単、散らかす最大の原因が外出しているから。

「全く、子供みたいにはしゃいじゃって

もう30近いって言うのに、昔とちつとも変わらないんだから」

長年の研究成果と、ようやく揃った実験材料を得て

幼い頃からの夢だった、人に使える魔術に酷似した力

精霊術を得る為に、行き倒れていた記憶喪失の少年を連れて

完成のための最後のピース『精霊との契約』へと旅立っていった。

「……昔か、ほんと今まで色々あったわよね」

割かしわがまま放題なパートナーが居なくなつて、のんびりする時間ができたら、

紅茶を片手に、今までの事を思い出した。

「あれから、もう20年以上か……」

きっかけは、あの人の幼い頃の夢、それについていく形でここまで来た。

大学院時代は、音楽にハマってバンドを組んでいた時もあったっけ  
いい思い出になるからと、私にマネージャーまで頼んできて、遊びたい放題だった

……もつとも、あの頃は私も競技用小型艇の活動に

よく顔を出していたから、人の事は言えなかったかもしれないけれど

「……あの事件をきっかけに、変わっていったのよね」

クラースと同じ夢を持ち、彼が師と慕っていた人

余りにも大きな被害を出した研究中の事故により、帰らぬ人とな  
り

学院での研究が全面的に禁止されても……

彼の遺志と、愛用してた帽子を受け継ぎ

学院を卒業した後、二人でこのユークリッドに流れてきた

そこから今に至るまで、研究に没頭するクラースの傍らで

家事全般を含む、研究の様々なサポートを行ってきた。

研究で何度も行き詰り、ようやく導き出せた今回の理論。

今度こそ、クラースの成功を願って、ユークリッドで崇められてる

大女神様に祈る。

(……お願いします、どうか今度こそクラースの夢が叶いますように  
……)

そして一通り祈り終えた直後、家のドアをノックする音が聞こえて  
きた。

ドアを開けた先に待っていたのは、八百屋のマギーおばさんの娘・

ナンシー。

「こんにちは、ミラルドさん。準備の方はもうよろしかったですか  
？」

彼女が来たのは御用聞き……というわけではない。

今日は、クラースを送った後に、彼女を港町ベネツィアに連れてい  
く約束をしていたのだ。

ベネツィアにある貿易商のレイオット社には、生活費の為に

私がクラースには秘密で、魔科学研究書の出版をしてもらっており

今日は、前に出した本の続編の打ち合わせの為に

わざわざ社用の小型艇まで用意してもらって、ベネツィアに行く予  
定だった

ただ、この間レイオット社の御曹司・エルウィンが村を訪れてから  
ナンシーが村の入り口のあたりでぼうっとして居るのを見かける  
ようになり

なにか悩みがあるのかと尋ねた処……ナンシー、彼に一目ぼれしたとの事

……そのまま、流れで連れて行ってあげると、安請け合いしてしまっただのである

まあ、ナンシーは美人で優しくて気立てもいいし、紹介するのに不足はないと思う

男は自分勝手に、女の事なんて気にもかけやしない

……等と言う言葉は、とりあえずグツと飲み込んでおくことにしよう

レイオット社から出してもらった小型艇は、もう村の外で待機していたので

私とナンシーは小型艇に乗り込み、ベネツィアへと向かった

この日、クラス達はシルフの住む連環遺跡で、天界の騎士『ワルキューレ』と出会い

出かける当初は予定にもしなかった大争乱に巻き込まれていったのだが……

私の方も、ベネツィアについてから、予想もしなかった事態に巻き込まれ

偶然が偶然を呼んだ結果、私自身も、その騒乱に加わることになった

……これは、今回の騒乱に対する私の始まりの話

異世界から飛ばされて来た二人と、一人の空族見習いの少年と共に送った

ベネツィアを舞台にした出会いと脱出の物語である

「おう、昨日のお嬢ちゃんじゃねえか！　もう具合は大丈夫なのかい？」

港には、大きな帆船や、漁をする為の小舟が、数多く停泊しており、船と倉庫の間を、日に焼けた偉丈夫達が荷物を背に、何度も往復し、縁日の屋台とさほど規模が変わらない露店の商人が、道行く人々を呼び込もうとしている。

ここにいる人達にとっては、これがごく普通の日常なのだろう。例え、昨日漁をしていた中、空から何かが落ちてきて、調べに行った所、気を失った少し身なりの整った少女と、彼女よりも年下と思われる小柄な少年が浮いていて、それを救助したうえで……

二人が訳のわからないことを言ったことに対し、なにか訳ありだということを感じて

落ち着くまで町長の家に世話になる事になったとしても、日常に影響はないようだ。

……せいぜい、私の事を覚えていてくれた人が、心配して声をかけてくれる程度である。

「ええ、おかげさまで……昨日はどうもありがとうございました」

赤いフードをかぶった大柄な男と、金髪を二つに束ねた小柄な少女との戦いの中、

突如として、空に開いた次元の裂け目に吸い込まれた私達は、気が付くと見たことのない天井を眺めていた。

介抱してくれた人達の話の聞くと、私達二人は、海に浮いていたところを、漁に出ていた漁師達が見つけた、

そのまま、この町『ベネツィア』の町長の家まで運んでくれた



のだという。

都心では、まず見ることでできない青く澄んだ空

時代錯誤とも思える、広い海の上を浮かぶ帆船

壁に掛けられた、見たことのない地形だらけの世界地図

……そして、これまでに感じたことのない強烈な聖霊力の躍動

ここが、私達の世界で無い事を確信する事に、さほど時間はかからなかった。

「それと、すいません……昨日話したもう一人についてなんですけど」

「ああ、残念だが見つかったって話は聞いてないな」

あの二人に襲撃された際に巻き込まれた3人目……

さくらちゃんは、救助された際に居なかったと告げられた

「それに、お前さん達が落ちてくるのを発見した、物見のパピーの奴にも確認したんだが……」

落ちてきた影は、やっぱり2つだけだったそうだ」

「そうですか……どうもすいません」

次元の裂け目に吸い込まれる直前に目にしたのは、強い流れに飲まれそうになるさくらちゃんと

彼女の手を放すまいとして掴み……それでも、力の奔流に勝てず、

その手を離してしまい、絶叫する李君の姿だった

そのショックからか、李君は目を覚ましたものの、冷静な彼にしては酷く落ち込み

今もなお、町長の家でベッドに臥せっている。

あの時の二人の姿に、私はかつて経験したある事件のことを思い出していた。

留学中、こつそりと二人で寮を抜け出し、森でみつけたリスを追いかけて、

……今回の事件と同様、突如として空に現れた次元の裂け目に吸い

込まれそうになり

そして、私だけが帰ってきてしまった2年前の事件。

あの出来事は、今でも私の心に大きな傷となって残っている。

もし、さくらちゃんも2年前に居なくなってしまうた彼女と同様の場所に飛ばされたのだとしたら……

……と、脳裏に浮かんだ最悪の予感を即座に振り払う

私達も、別世界とはいえ、ちゃんとした人間の住む世界にたどり着いたのだ。

彼女も、場所が違うだけで、この世界のどこかに来ているのかもしれない。

それでも、見知らぬ土地で、身一つでは相当な苦労になるかもしれないが、

あの時と同じ道をたどるわけにはいかない。

……そう思い、前に進むために考えを切り替えることにした。

李君も、もう少しすれば落ち着いて、同じ結論に到達するだろう。

そんな事を考える中、突如聞こえてきたプロペラ音のする方を見てみると……

赤い色をした、まるでゲームの中に出てくるような空飛ぶ船が、港の方へ向かってきているではないか

そんな現実離れた船を目にして、少し放心していると……

「おっと、お嬢ちゃん天翔艇（カーム・シップ）は初めてかい？」

……と、さつきのおじさんがあの船について教えてくれた。

あれは紅山猫（レッドリンクス）という義賊の空賊集団の船だということ

義賊とはいえ、そんな集団を町に入れてもいいのかと尋ねると、

彼らのターゲットとなる悪徳貴族が所属する国の都市部では、言うまでもなく取り締まりが厳しいが

この町のような、辺境にある独立自治を持つている所では、よほどの無法者で無い限りは平気で受け入れているのだという。

元をただせば、この町を建立したのも、近辺の海を御したエンリケ

族という海賊だったとか

そして、話を聞き終えて、李君の様子を見ようと港を後にしようとした所で……

……突如、背後からは大きな悲鳴が聞こえてきたのだった。

激戦の後から、次の始まりまで　　〜第一部終了後〜  
ジャンブル・プラトウーン―01

ロンドン&東京都港区融合地区解放作戦、及び超古代都市ツールを舞台とした

エルカーエス、及びミルドレッドIIアヴァロン一味との激戦が終わってのち……

扶桑で敵から奪い、以降皆の足代わりとなっていた

天翔艇・レッドクロスが撃墜されてしまったこと以外は、大きな被害はなかったが

連日の戦闘や緊張で溜まった疲労が、一山越えたタイミングで噴出しており

戦闘終了後、何故かブリタニアから見てトールの反対側にあった

我が家にも等しい拠点、食堂【秘密基地】と、アパート【喰い倒れ荘】で

皆、疲れをいやすための休養を取っていた。

「ああ……ようやくさくらちゃんの姿を、再びビデオに収めることができました

まだ、体調が万全ではないので衣装は作れませんが

元気なさくらちゃんを撮影できて、幸せ絶頂ですわ〜♪」

作戦開始前日、突如全身が徐々に石化し、崩れていく奇病【風化病】にかかってしまったっていた知世ちゃんは

特効薬が間に合い、まだ本調子ではないものの、

ビデオカメラを片手に事件発生からずっと出来なかった親友の撮影に勤しんでいる。

「ほえ〜……やっぱり、恥ずかしいよう……」

そんな真昼の淡い日差し……は、赤い霧のせいで差し込まず  
親友の指でつくった……ではなく

れっきとしたビデオカメラのフレームの中で、ポーズと表情をリク  
エストされている

今回の事件の発端ともなった少女・さくらちゃんも

困った顔をしながらも、ようやく出会う事のできた親友達と共に、  
明るい笑顔を見せている。

「……空中要塞で、さくらの話題が出たときも大概だと思ったけど  
知世って、あそこまで変わった性格だったんだ……」

「……いや、今の大道寺は、まだおとなしい方だ」

「いつもは、とても落ち着いたおとなしい性格だったけど

……さくらちゃんが一緒だと、まるで別人みたいなの」

「ホンマ、知世はさくらが絡むと性格豹変するさかいなあ

……ま、ワイにとつては、あれが知世らしいと思うけどな」

彼女をずっと探していた小狼とケルベロス

そして年が近いからか、この二人と仲が良くなったユーノ、なのは  
ちゃんは

これまで見たことのなかった知世ちゃんの一面に戸惑いながらも  
微笑ましそうに二人のやり取りを眺めていた

そんなやり取りを横目に、さきほど皆で取った朝食の片付けをして  
いると

カウンターのの上に乗せてある黒電話……のガワを乗つけた通信機  
のベルが鳴り響く

受話器を取ると、電話の先からは酷く疲労した声が聞こえてきた

「……目が醒めるような激辛麻婆丼お願い」

電話の主は、古代都市の一角で見つけた研究施設で

泊まり込んで作業をしている、華明芳博士だった

動力部に異常を抱えていながら、それでもなお共に戦ってくれた美鳳は

念願かなって、制作者の明芳博士と合流出来たのだが

墜落寸前のレッドクロスを、安全に降ろしたうえ、激しい連戦を重ねた為

動力炉以外にも損傷があったらしく、現在明芳博士の手でメンテナンスを受けている。

美鳳の活躍に関して、明芳博士は暗い顔をしていたが、同時に、美鳳の判断と行動を誇らしくも思っている様子だ。

こうして、当初の目的を達成できたメンバーもいる中で、未だ目的を遂げられていない者達も多数存在している

「さくらちゃんが見つかってよかったけど……」

冴姫ちゃん、一体どこに行っちゃったのかなあ……」

無事だといいただけれど……

「あやねも、さくら達の話で無事なのは確認できたが……  
今頃、なにをしているのだろうか……？」

さくらちゃんを見つける知世ちゃん同様

事件発生以降、行方不明となった親友を探しているはあとちゃん  
と、忽那

「そういえば、チェスターさんとクレスさんも幼馴染だったよね」

「あの二人も、無事に再開は出来たが……」

あの様子だと、それで終わりというわけにはならないだろうな」

故郷を滅ぼされ、復讐の為に仇を負い、結果死んだと思っていた親友と再会でき、

仇に名実通り一矢報いたものの、異常とも言える生命力に阻まれ  
未だ仇を追う身であるチェスターとクレス、そしてミント

現在は、風化病の蔓延しているサンドラ族の集落の治療を行う為  
一部のメンバー達と、サンドランドへと同行している

「ミゲールさんも、マリアさんも、そしてアミィも  
村の人達は、本当にいい人たちだったから……」

「……こんな事、言えた義理じゃないのはわかってるけど」

「そんな！ ティアさんのせいじゃないですよ!!」

親に、そして兄弟姉妹にも等しい仲間達が起こした反乱が予想外の  
被害を出し

その結果に苦悩しながらも、仲間の蛮行を止めるため

あえて裏切り者の名を受けたスピリティア

「ありがとう、でも今になって思うんだ……」

自分に向けられてる悪意は、我慢すればいい……そう思っていたけ  
ど

皆もきつとそうだって勝手に思い込んだ結果

無理をさせてしまったんじゃないかって……」

「……忌避される魔力使いの苦悩か

その気持は、わからなくはないがな……」

「……真面目すぎただけなんじゃない、アンタも、アンタ達の仲間も」  
沈痛な顔をしている面々の隣から

奇妙な露出をした紅白巫女と、変わった風貌の自称普通の白黒魔法  
使いが

そっけない態度で、口をはさんできた

「霊夢、魔理沙」

「エルカーエス、結構統制の取れた組織みたいじゃない

そんな組織が反乱を起こすのに、たった一人の思い込みで変わるわ  
けないじゃない」

「それは……そうだろうか……」

「それに、神聖帝国だったか？ そいつらのやったことのほうが問題  
だろ

幻想郷で例えて見ると……異変解決する巫女の神社に、里とかの人  
間が

ろく賽銭を入れないのに、貧乏巫女・だらけ巫女って馬鹿にするよ  
うなもんだろ

結果がどうなるか、見え見えだぜ」

実際に神聖帝国の関係者を見たのは、スピリティア達と出会った訓  
練所だけだが

どうにも、いけ好かない雰囲気を持った奴らだらけの上

その後に出会ったベネツィアの住人からも、紅山猫の空賊達からも  
神聖帝国の評判はすこぶる悪かった

齢15のスピリティアに、新兵の教官を任せているあたり

マギを忌避している割に、重宝している人材なのかもしれないが

……

いずれにせよ、神聖帝国の施政・経営能力には大きな疑問が残る

「……魔理沙、それあたしに結構当てはまる内容なんだけど……」

そんな魔理沙の発言に対して、霊夢から抗議の声が上がった

「言われて見れば……じゃあ、霊夢もいつか反乱するの？」

「イヤよ、面倒くさい……つまんない外野の文句なんか

ほっかむりして、知らんぷりしてりゃいいのよ」

……霊夢の発言内容も一つの手ではあるのだろうが

それだけで済む話であれば、ここまで拗れはしなかつただろう

「私達は、伯爵のおかげで不自由なく暮らせてきたけど

……そうじゃない子達も、たくさん見てきたから……」

重い表情で、吐き出すように答えるスピリティア

……きつと、過去にあまり口にしたくないような重い経験があるの

だろう

深すぎる恨みを買っているせいで、普通に考えれば神聖帝国は

すでに滅ぼされているだろうが、万が一にもまだ存在しているとす  
れば

エルカーエスを倒した後、なにが起こるかは考えるまでもあるまい

「なんとか、ならないのかなあ……」

感情的な面では同意だが、実際現時点ではどうしようもない話であ



る

エルカーエスとは、あからさまな敵対関係にあるし  
神聖帝国とて、別に味方にした相手というわけではない

……エルカーエスと言えば、事件開始直後から奴等を手助けして来  
た

フェイトと言うさくらちゃん襲撃の実行犯を初めとする謎の戦士  
達や

ブラックワルキューレ、バルバトスと言った伝説扱いの連中の事も  
ある

「黒キューさん、かむかむさんの親友だったんだよね  
いつたい、どうしてあんなっちゃったんだろう……」

「それに、あのバルバトスも……戦闘態勢に入っていないのに  
隠れてみてるだけで動けなくなるほど、すごい魔力と威圧感だった

……

……あれが、本当に人間なの？」

「時の鍵事件の時は、桁外れの魔力の持ち主やったけど  
人間なんは間違いなかったで

……どこから来たのかは、てんで分からへんかったけどな」

「ゼットにギルガメッシュ、そしてあのテッド・ブローラーっていう  
人も

すごい実力者だった……

伯爵は、いつたいどこからあの人達を連れてきたんだろう？」

少なくとも、ブラックワルキューレとバルバトス以外は

あの世界の存在であるとは考えにくい

協力者であるミルドレッドの戦力という線も無いだろう

……考え付く可能性としては、エルカーエスも、そしてミルドレッ  
ド一派も

本来の黒幕に操られて動くコマという可能性だ

「エルカーエスが……コマ？」

協力関係が見て取れる双方の組織だが、接点という意味では  
繋がる要素はほとんど見当たらない

「言われてみれば……いったい、どうやってあの二つの組織がつかった？」

あのフェイトという子は、ユーノと同郷という話なので、その点を考えると

最低でもあと一つは、協力関係にある組織があるはず

加えて、彼女を見る限り、幼いながらも戦士としての素質はあるがどうみても、組織の長として行動しているようには見えない

「つまり、この事件の黒幕は……」

可能性の一つではあるが、彼女に直接つながる命令系統

その手綱を握っているものこそが、今回の事件の黒幕という事だ

……といっても、碌な行動がとれない今は考えても仕方ない

現状の活動内容は、出来る範囲で味方を増やしつつ、敵を作らない事に限る

「……それはそうだが、味方を増やすといってもどうやって？」

幸い、これまでの積み重ねで協力を取り付けることのできる組織はだいぶ増えてきた

天城博士の伝手と、異変の発生で協力してくれる事になった

扶桑皇国の軍と政治ののお偉いさん達は、これまでの成果を認めてくれ

引き続き、協力をしてくれることになった

今回の舞台となったブリタニアも、解放戦の協力により

交渉するだけの信頼は得る事が出来た

近い内に、話し合いの場を設けてもらう予定である

港区側も、ブリタニアと条件は一緒である

すでに、異変後からブリタニアと協力関係にはあり

さらに、手持ちの伝手を使って、一部の企業関係者と連絡を取る事ができた

今回の事件と立地上、多少の不安は残るが……まあ、それも織り込み済みではある

かくして、赤い霧に包まれた歪んだ世界の中で

これまでとは勝手の違った、味方を増やす為の戦が始まったので

あつた